

『唯心房集』所収今様についての考察

——寂然自作の可能性——

具 惠 卿

はじめに

平安後期の、寂念・寂超とならぶ常磐三寂三兄弟の一人寂然（俗名、藤原頼業）は、勅撰歌人として名の知れた人物である。『千載和歌集』以下に四八首入集しており、また多くの私撰集にも採られるなど、当時高く評価されていた歌人であった。西行とは信仰・和歌の両面において深い交友関係を持ち、二人の交わした贈答歌は数多く存している。寂然の詠作は、家集『唯心房集』（以下『唯心房集』Ⅰと称する）¹と、法文歌・今様八〇首を収めた別系統の『唯心房集』（以下『唯心房集』Ⅱと称する）があり、このほかに寿永百首の一つである『寂然法師集』、寂然の釈教歌一〇〇首を収めた『法門百首』²によって知ることができる。この中で、『法門百首』は、『新古今和歌集』の入集歌選定の際の資料となり、百首のうち一二首が採用されるなど、当時としては非常に高い評価を得ていたと思われる。また、そのほかにも旺盛な詠作活動を見せ、家集が撰集さ

れるその前からすでに別の家集が自撰されていたことも推測されている。³

本稿では、多くの寂然の歌集のうち、特に、法文歌と今様とを収めた『唯心房集』Ⅱに焦点を当てて考察を行いたい。この集は、十重禁戒・十法界・十如是を詠んだ三〇首の法文歌と五〇首の今様によって構成されている特異な集である。この集の成立に関しては、明らかにされていない。そうすると、この集に収める作品が本当に寂然の作なのかどうか問題となろう。当初この集は、寂然自作のものとして考えられていたようである。が、近年の諸研究では、寂然自作と認めているものはない。しかし、稿者は、『唯心房集』Ⅱの詞章には勅撰集や家集などの寂然の歌の表現と著しく近いものが多く存しており、寂然の実作である可能性もあると考えている。本稿は寂然の実作の可能性を探ることを目的とする。その手順として、『唯心房集』Ⅱと寂然の歌とを比べながら、『唯心房集』Ⅱが寂然自作の集である可能性を提示したい。

一 『唯心房集』Ⅱの寂然自作の可能性

『唯心房集』Ⅱの作者や成立に関して、管見に入った論文や文学辞典類に記されているものを年代を追って示す。

・（前略）出家して唯心坊と称し、寂然を法名とした。家集に、寂然法師集・法門百首・唯心房集がある。特に唯心房集は和歌三十首、今様歌五十首を収めているが、かように沢山の今様歌

を作ったことは珍しい。(玉井幸助氏、昭33・8³)

・寂然(頼業)の歌集・今様集。(中略)特に今様は『梁塵秘抄』以外の多数の今様の集成として貴重な存在で、『秘抄』と一首重複してもいる。朗詠や和歌を巧みに和らげ用いた優雅な作が多い。なお、和歌や一六三首を収めた同名の書を名古屋関戸家蔵。坊門局筆で、定家が巻首に寂然の経歴を記している。書道史上でも注目すべき書である。

(新聞進一氏、『和歌文学大辞典』昭37・11)

・(前略)もちろん今様から和歌を作ること想像され愛誦句を記載したとも考えられるが、あるいは寂然の作か、という可能性も残る。

本集の題と、『唯心房集(高)』が同題であり、元来一本だったのではなからうか(橋本不美男氏)。この推測に立てば本集が『唯心房集(高)』の巻頭もしくは、巻末、に散在したか、あるいは本文中に集中的に含まれていたかの三通り或いは四通りの可能性が考えられるが、それぞれの構成、内容から検討してみると、巻頭、本文中は不可能で、一本を成していたとすると巻末に置かれていたとするのが最も自然であるが確証は見出せない。

(武田容子氏、昭45・3⁴)

・(前略)前半が釈教歌(三〇首)、後半が今様五〇首で、後者は、梁塵秘抄にみえるものも含まれ、寂然作か寂然の愛唱歌を収録したものか明らかではないが、歌謡研究史上早くから注目され、

(中略)成立年時未詳。

(井上宗雄氏、『私家集大成』中世I解題 昭49・7)
・今様にも仏教色が濃く、唱導のための歌集のごとき趣を有す。ただ今様は、『梁塵秘抄』所収のものも見られるので、すべてを寂然の作とするには問題があるう。成立年時は未詳。もともとは関戸本系の本と合わせて一巻であったとも推測されるが、それぞれ別個に成立した可能性が大きい。

(安田純生氏、『日本古典文学大辞典』昭60・2)

・今様は、隠遁の境遇や心境を述べた寂然作と思われるものもあるが、梁塵秘抄と重複するものを含み、寂然愛唱の今様を収録したかと考えられる。(中村文氏、『和歌大辞典』昭61・3)

これらのほかにも『唯心房集』IIの作者や成立に関して言及しているものが存すると思うが、右を眺めてみると、大まかな流れはつかむことができる。当初は寂然がこの集の作者として認められていたようだが、次第に認められなくなるような観があるのである。いちばん新しい『新編国歌大観』第七巻の解題(松野陽一氏、平元・4)さえも、この問題についての言及を避けている。

前述したように、『唯心房集』IIは三〇首の釈教歌と五〇首の今様とから成っている。釈教歌三〇首のうち、勅撰集に六首採られており、そのうち『新古今和歌集』釈教部に四首採られている。『新古今和歌集』には、寂然の歌が一四首入集されているが、うち一二

(表)

《※()は作者、()は「法門百首」の歌注》

歌番号	入集されている歌集	漢詩	寂然関係の集
三一	古今(素性法師)・新古今(赤人)	和漢(白居易)	唯心・新古今
三二	古今(伊勢物語)有原業平)・金葉(平康貞女)・千載(西行)	和漢(白居易)	唯心・新古今
三五	古今(伊勢物語)有原業平)・金葉(平康貞女)・千載(西行)	和漢(白居易)	唯心・新古今
三六	統詞花(寂念)・風情集(藤原公重)	和漢(白居易)	唯心・新古今
三七	古今(伊勢物語)読人不知)赤人集・金葉(俊忠)・千載(崇徳院)	和漢(白居易)	唯心・新古今
三九	後撰(古今和歌六帖)読人不知)・金葉(基俊)	和漢(白居易)	唯心・新古今
四〇	古今(御春有助)	和漢(白居易)	唯心・新古今
四一	拾遺(曾禰好忠)	和漢(白居易)	唯心・新古今
四四	月詣(祐盛法師・敦仲)	和漢(白居易)	唯心・新古今
四五	後撰集	和漢(白居易)	唯心・新古今
四六	後拾遺(円昭法師)	和漢(白居易)	唯心・新古今
四七	新古今(蟬丸)	和漢(白居易)	唯心・新古今
四八	拾遺(読人不知)	和漢(白居易)	唯心・新古今
四九	後拾遺(清原元輔)	和漢(白居易)	唯心・新古今
五〇	古今(貫之)・続後撰(経家)	和漢(白居易)	唯心・新古今
五一	新古今(伊勢物語)行平)	和漢(白居易)	唯心・新古今
五二	万代(相模)	和漢(白居易)	唯心・新古今
五三	拾遺	和漢(白居易)	唯心・新古今

五四
五六
六〇
六三
六六
七〇
七一
七二
七三
七六

和漢（源順）

和漢（元稹）

和漢（大江以言）

（法門）

（法門）

（法門）

法門・唯心

和漢（源正通）

法門

首（二二五）〜一九五五、一九五七、一九五九〜一九六四）が釈教歌であり、当時、寂然の歌は釈教歌を中心に高い評価を得ていたことが分かる。この寂然の釈教歌のうち、前の八首は『法門百首』の歌で、残りの四首は『唯心房集』Ⅱ（通し番号で一〜三、五）の釈教歌の歌である。これを見ると、『新古今和歌集』の入集歌選定の際に寂然の両集が何らかの影響を与えていたことが想像される。とすると、これらの両集は『新古今和歌集』成立（元久元年（一一二〇）四）後鳥羽院の下令から建保五年（一一二一）六）和歌所の証本となるまで一六年かけて完成）以前にすでに成立していたことになる。『法門百首』の成立に関しては、保元の乱が起きた一一五六年から崇徳院崩御の一一六四年の間に、讃岐の崇徳院を慰めるために寂然自身が

企画して、それに何人か（稿者注：崇徳院・寂超・源季広・素覚・惟方など―現在はその一部が勅撰集などに見える）が加わって次々に成立したであろう、ということが推測されている。²⁵⁾ 寂然は、久寿年間（一一五四〜一一五六）以前に出家しており、この時期に、釈教を中心に旺盛な詠作活動を行い、『法門百首』の成立を見た。『唯心房集』Ⅱの釈教歌の成立は明らかではないが、釈教歌に続く今様には『唯心房集』Ⅰ（一一六二〜一一六七）の歌を典拠にして作つたと考えられるもの（四九番、四節で説明）が存するので、大まかながら『唯心房集』Ⅰの成立と『新古今和歌集』成立の間に作られたと見るのが妥当であろう。

先述した論文や文学辞典類の記述にも釈教歌三〇首が寂然自作の

歌であることについては、特別の異論はない。しかし、今様だけを
取り上げて、それが寂然自作のものであることに疑念を抱くのは如
何であろうか。もともと別のものであったのを誰かが筆写の過程で
くつつけることがあったらどうか。最初から二つが一緒になってい
たのではなからうか。そういう見方が自然ではなからうかと思う。

次に『唯心房集』Ⅱ所収の今様が寂然自作である可能性を今様の
詞章面から考えてみたい。

二 『唯心房集』Ⅱ所収今様と和歌との関係

『唯心房集』Ⅱの今様には、和歌に類似している表現が多く、作
者が意識的にそれらの和歌を今様中に取り入れていたことが推測さ
れる。作者が寂然自身と想定すれば、それは彼が歌人であることが
影響していたのであろう。それらの今様に取り入れられた和歌は、
人口に膾炙した有名な古歌や、寂然と近い時代の歌人の新作の歌な
どである。寂然自身の歌も含まれている。前者の有名な古歌に類似
している今様や新作の歌を取り入れた今様は、『梁塵秘抄』巻一・
巻二や『古今目録抄』料紙所収の今様、『宝篋院陀羅尼經』所収の
今様など、多くの今様集にその様子を確認することができる。しか
し、後者の寂然の歌を取り入れた今様に関しては、『唯心房集』Ⅱ
の作者が明らかではない現在、明確な言及は避けるが、集中的に寂
然の歌を取り入れている点は、他の今様集には見られない、『唯心
房集』Ⅱだけに見られる独特のものと見える。

まず、これまでの調査によって確認できた『唯心房集』Ⅱの今様
と和歌との関連について、その典拠と言えるものを表にした(二八
〜二九頁の表参照)。

表で使用した略称は次のようである。

- | | | | |
|------|------------|------|------------|
| ・古今 | — 『古今和歌集』 | ・続後撰 | — 『続後撰和歌集』 |
| ・後撰 | — 『後撰和歌集』 | ・統詞花 | — 『統詞花和歌集』 |
| ・拾遺 | — 『拾遺和歌集』 | ・月詠 | — 『月詠和歌集』 |
| ・後拾遺 | — 『後拾遺和歌集』 | ・万代 | — 『万代和歌集』 |
| ・金葉 | — 『金葉和歌集』 | ・和漢 | — 『和漢朗詠集』 |
| ・千載 | — 『千載和歌集』 | ・唯心 | — 『唯心房集』Ⅰ |
| ・新古今 | — 『新古今和歌集』 | ・法門 | — 『法門百首』 |

『唯心房集』Ⅱの今様は五〇首であるが、このうち、表に示した
ように今様の創作にかかわったと考えられる和歌を提示できる今様
は二八首であり、和歌が今様創作に深くかかわっている。表につい
て少し説明を加える。表は三つのグループに分けた。第一のグルー
プは、明らかに人口に膾炙した有名な古歌を利用して今様化したも
のや、新作の歌を取り入れて今様化したと考えられるものを挙げ、
第二のグループは、漢詩、特に『和漢朗詠集』の漢詩を利用して今
様化したと考えられるものを、さらに第三のグループは、寂然の歌
と今様とが類似しているものを挙げた。へは、『法門百首』の
歌ないし歌注に今様との類似が見られるものに付けた。第一のグル
ープと第二のグループは、明らかに典拠と言い得るが、第三のグル

一ブは、今様と和歌との前後関係を明らかにすることは困難である。自分の歌を今様化した場合と今様を自分の歌にした場合との明確な判断が困難であるからである。本稿の考察によつて、この問題に關しても明らかになるだろう。

次節では、『唯心房集』Ⅱ所収の今様が寂然の実作であることを明らかにするために、表のうち、寂然の自作の歌と今様との比較を行うために用例を挙げる。

三 『唯心房集』Ⅱ所収今様と寂然自作の歌との比較

稿者は、『唯心房集』Ⅱ所収今様の詞章と表現の類似が見られる歌をすべて検出し、その用例の中で最も類似している表現の歌を掲出した。また、表現の類似は見られなくとも、同じ趣向を有している歌を掲出した。それらを比較して、最も類似しているものを見ると、圧倒的に寂然の歌が多く浮上した。以下に挙げた用例は、『唯心房集』Ⅱ所収今様と寂然の和歌との間に、表現の類似が見られるものである。

三 たちうきはなの もとなれば かへる事こそ わすれぬれ 尊
のまへには なさけあり 糸ひをすすむる はるのかぜ^註

・『唯心房集』二二

(春のうたのなかに)

山ざくらちるこのもとはたちうくてやすむとなしに日をくらし

つる

・『新古今和歌集』卷二十・釈教・一九六四

不酷酒戒

(寂然法師)

花のもとつゆのなさけはほどもあらし糸ひなすすめそ春の山か
註

※『和漢朗詠集』卷上・春興・一八

花の下に歸らむことを忘るるは美景に因つてなり 樽の前に醉

ひを勧むるはこれ春の風^註

(花下忘歸因美景 樽前勧醉是春風^註)

三

月すむあきをば さておきつ さみやみこそ ただならぬ は
なたちばなの かをるかに なごりおほかる 郭公

・『新古今和歌集』卷二十・釈教・一九五三(『法門百首』一五)

梅檀香風、悦可衆心

(寂然法師)

吹く風にはなたちばなやにほふらむ昔おぼゆるけふの庭かな

・『唯心房集』三五

(夏のうた)

なつかしきこゑのにほひはほととぎすはなたちばなにねぐらす
ればか

※『千載和歌集』卷三・夏・一七六

百首歌めしける時、花橘の歌とてよませ給うける

崇徳院御製

五月雨にはなたちばなのかをる夜は月すむ秋もさもあらばあれ

・『古今和歌集』卷三・夏・一三九（『伊勢物語』六〇段）

（題しらず）

よみ人しらず

さつきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞする

三 あるかなきかの 世中を なににかたとへて おもふべきい

はもるしみづに やどりつつ むすべどとられぬ 月のかげ

・『法門百首』恋・六九

但念寂滅不念余事

いづくにか心をよせむうきなみの有るかなきかに思ひしづめば

止観を修する人、ただ法性の理を思ひて、余念まじへざれと

いふなり、あるかなきかに思ふらんは、中道の理にこころを

とどむるにや

・『唯心房集』四三

（あめのうちのなでしこ）

月のもるいはまのし水むすぶよはこころのうちもすずしかりけ

り

※『後撰和歌集』卷十八・雑四・一一六四

（題しらず）

（よみ人しらず）

世中といひつるものかかげるふのあるかなきかのほどにぞ有り

ける

・『金葉和歌集』卷二・夏・一五四

公実卿の家にて対水待月といへる事をよめる 藤原基俊

夏の夜の月まつほどのてずさみにいはもるしみづいくむすびし

つ

四 あきのはつかぜ たちぬれば ことしもなかなばに なりにけり

おほくのとし月 なにをして ことぞともなく すぐすらん

・『千載和歌集』卷四・秋上・二三〇

初秋の心をよめる

寂然法師

秋はきぬとしもなかなばにすぎぬとや荻ふくかぜのおどるかすらん

四 ちぐさきにほへる あきののの はなはいづれも みにぞしむ

むなしきいろぞと おもはねば これゆるゑ生死に かへるなり

・『千載和歌集』卷十七・雑中・一〇六八

よをそむきてまたのとしのはる、花をみてよめる

寂然法師

この春ぞおもひはかへすさくら花むなしき色にそめしこころを

・『法門百首』春・九

花有着身不著身

諸人のつらぬる袖に散りかかる花もわきてぞ身にはしみける

是をおなじむろに天女の散らすはな、菩薩の衣にはつかず、

二乗の衣にはつくり、まどひをしめす花なれば、いまだ界外

のまどひをだんぜんぬ人のみにつきしなり

四

あれたるすみかを きて見れば まがきにうつして きみがう
系し ひとむらすすぎ むしのねの しげきのべとぞ なりに
ける

・『唯心房集』五四〜五六

(秋の歌の中に)

いづかたか人のかよひしみちならんにははさながらしののをす
すぎ

よもぎふになりゆくやどはきりぎりすなくねをとこのものとし
そぎけ

むしのねはのべにゆきてぞききしかどいまはまがきを人やたづ

ねむ

※『古今和歌集』卷十六・哀傷・八五三

藤原のとしもとの朝臣の右近中将にてすみ侍りけるさうし
の身まかりてのち人もすまずなりにけるを、秋の夜ふけて
ものよりまうでけるついでに見いければ、ものありし
せんざいもいとしげくあれたりけるを見て、はやくそこに
侍りければむかしを思ひやりてよみける

みはるのありすけ

きみがう系しひとむらすすぎ虫のねのしげきのべともなりにけ
るかな

四

よもにこのはは ちりまがひ ゆふべのこがからし みにしめ

ど おもふことなき 人になは あきのあはれも しらじかし

・『唯心房集』一四〇・一四一

よしだの齋宮かくれさせたまひてつぎのとしの神な月のこ
ろ、おほむはてなどすぎにければさぶらふ人まかりいづ
とききて、あひしれりける人のもとへいひおくりける

きみまさでよもにこのはもわかるべきやどのしぐれをおもひこ

そやれ

かへし

しぐれつつよもにこのはのちるほどはつるのはやしもかくやと

ぞおもふ

・『法門百首』秋・三〇

經行林中

紅葉はのちる木の本を詠むれば色にめづとや人はみるらん
百毫のひかりにさまさまの事みゆる有さまをとける中に、菩
薩の林の中に行じて仏道修することをあかす文なり、あらし
の松におつるこの葉も、観恵をすすむるたよりなるを、衆会
の中に機見ことなれば、ただ秋の色をしむかとあさくみる
人もや有りけむと、うたがへるにぞ

四 までどもまでども きみはこで さよもなかばに すぎにけり

をぎのはそよめく かぜのおとは こぬひとよりも うらめし
や

・『唯心房集』(六)

(秋の歌の中に)

をぎのはのそよぐにいまはおどろかず人のわけくるならひなけ
れば

※『拾遺和歌集』卷十三・恋三・八三三

三百六十首のなかに

曾禰好忠

わがせこがきまさぬよひの秋風はこぬ人よりもうらめしきかな

咒

ひとり物おもふ あきのよは まんまんとしてぞ あげがたき
またたくもし火 ほのかにて しづかにまどうつ あめのこ

ゑ

・『法門百首』秋・二八

故仏説（前略）為生死長夜

秋の夜のおくるまつだにあるものをいかにすぎにし夢の中ぞも

(前略) 或はかべにそむけたるともし火のほのかなるかげに

思ひをよそへても、長夜の暗のうちにひさしくまよへる事を

かなしび、まどうつあめのしづかなるゑに袖をぬらしても、

中有の旅の空に独いでん事を歎くべきなり

※『和漢朗詠集』卷上・秋夜・二二三

秋の夜長し 夜長くして眠ることなければ天も明けず 歌々た

る残んの燈の壁に背けたる影 蕭々たる暗き雨の窓を打つ声

白上人

(秋夜長 々々無眠天不明 歌々残燈背壁影 蕭々暗雨打窓声

白上人)

咒 冬のけしきに なりぬれば おほはらやまこそ あはれなれ

まきのすみやく すみがまに ゆきまをわけつつ けぶりたつ

・『唯心房集』一三三

閑居冬日

ながめやるおほはらやまのなくさめはたつすみがまのけぶりば
かりか

咒

ひとり見まうき あたらよの 月とゆきとをと おもへども
あはれしるべき ひとものなき しばのいほこそ かひなけれ

・『唯心房集』二二八〜一三〇

(冬のうたの中に)

たづねべきとしなければあたらよの月とゆきとを一人見るか

な

たづねきてみちわけわぶる人もあらじいくへもつもれにはのし

らゆき

ふみわけてくる人もなきにはのゆきはただおほかたにあはれと
ぞ見る

※『後撰和歌集』卷三・春下・一〇三（『信明集』九九）

月のおもしろかりける夜、はなを見て 源さねあきら

あたら夜の月と花とをおなじくはあはれしれらん人に見せばや

吾 しづかにねざめて つくづくと はかなきこのよを おもふま

に よやあけがたに なりぬらん かものかはらに ちどりな

く

・『法門百首』秋・二八

故せむ仏説為生死長夜

秋の夜あくるまつだにあるものをいかにすぎにし夢の中ぞも

かみの文にいまだまことのさとりを得ざれば、つねにゆめの

中にありといへるころなり、明けがたき秋の夜、つくづく

とおもひのこす事なく、もろこそまでもかよへど、仏道をお

もふ心はまれなり、しづかにねぶりをさめてころをすまむ

をりに、このよのはかなくすぎゆく事をおもひつづくべし、

吾 おもはぬたびの そらにいでて みやこはくもぬに なりにけ

り きみとながめし よはの月 ひとりみるこそ あはれなれ

・『唯心房集』八八・一一〇

（月の歌）

一人のみながむる秋のつもりてぞ月のあはれはしらはてぬる

心ならずふなでして、とほきるなかにすむ人をおもひやり

て

くもるにてむかしながめし月のみやたびのそらにもはなれざる
らん

・『法門百首』無常・八八（『千載和歌集』卷十九・一二五）

不滅不久燃

煙だにしばしたなびけとりべ山立ちわかれにし形みともみむ

（前略）あづまちにおもひ立ちて、逢坂の関打ちこゆるより、

わけゆくたびごろも日をかさねてしをれまさり、むすぶ草の

枕も世をへて露けきに、八はしのわたりもすぎ、すみだ川の

ほとりまでも行きはなれぬれば、みやこ鳥にこととひけむむ

かしおもひしられて、むさしの草のゆかりもむつまじきの

みかは、あとに忍ぶ人はいかなるさとのなど、はるかなる雲

井を思ひやりて、空行く月のめぐりあはむ事、さだめなき事

いとあはれなれど、おのづからかよふたまづさにころをな

ぐさめ、さりととも頼むころにひかれぬるたびのそら、け

ぶりにそはぬかなしさは、いたづらにむねのおもひをこがし

て、むなしきあとにはしばしばもかげとどむべしとやはおほ

ゆる、（以下略）

吾

あかずとながむる はなのいろも しほみてのちには たれか

みる せいしがかたちを もたりとも おいなばとなりの ひ

ととおなじ

・『法門百首』無常・八四

六拾四
探花萱日中能得幾時鮮

朝顔の日影まつまをさかりとそはなめく世こそ哀なりけれ

あさがほはすこしふりたるいへの、はつれゆくすいがいに咲

きかかりて、心地よげなるあさつゆのぬれいろ、いとままめ

かしけれど、日ざしいでぬればまことに見どころなし、ひと

のよも又かくのごとし、はなとさかゆれど、露のいのちきえ

ぬれば、蓬が本に埋もれて、むなしきあとをばたづぬる人や

はある、(後略)

突 あけぬくれぬと いふほどに 我がみははかなく おいにけり

かがみのかげに ふれるゆき みればなみだも とどまらず

・『法門百首』無常・八二

八二
人命不停過於山水

瀬をはやみいはゆく水もよどみけりながるとしのしがらみぞ

なき

水無反夕流年涙といへることもおもひあはせられて、ま

ことになみだとどめがたき文なり、山川のはやきながれも、

つもる木の葉にせかれて、いはまによどむかたり、ながるる

としなみ、しばしとどまりがたし

※『古今和歌集』卷十・物名・四六〇

かみやがは

つらゆき

うばたまのわがくろかみやかはらむ鏡の影にふれるしらゆき

・『和漢朗詠集』卷下・老人・七二九

水は反る夕なし流年の涙 花はあに重ねて春ならんや暮齒の粧

ひ 新古今和歌集 卷三

(水無反夕流年涙 花豈重春暮齒粧 新古今和歌集 卷三)

吉 無常おもはぬ ひとばかり あはれはかなき 物はあらじ ゆ

きのやまなる とりだにも けふかあすかと なくとかや

・『法門百首』冬・三七

雪山之鳥

夜を寒み高ねの雪に鳴く鳥のあしたのねこそ身にはしみけれ

雪山の鳥あり、夜るなきていはく、寒苦われをせむる、夜あ

けばすつくらん、あけて又なく、今日しなむ事をしらず、明

日死なむ事をしらず、いかですをつくりて無常の身をやすく

せむと、心なき鳥だにもつねなき世をば思ひしるなり、人身

を受けながら、いとふころなからむこそはづかしけれ、な

さけあらむ人、あしたのねはまことにしみぬべし

※『新古今和歌集』卷十七・雑中・一六五一(『伊勢物語』八七

段)

布びきのたきみにまかりて

中納言行平

我が世をばけふかあすかとまつかひのなみだのたきといづれた

かけむ

二 あるにはかなき ものはよな まがきのあさがほ のへのつゆ

いなづまかがるふ みづのあわ ゆめよまほろし ひとのいのち

・『唯心房集』一四七・一四八

無常の心をよめる歌

あさがほのはなにやどれる露の身ははかなきうへになほぞはかなき

かりのよにたとへて見ればいなづまのひかりもなほぞのどけかりける

・『法門百首』無常・八四く八六

採花萱日中能得幾時鮮

朝顔の日影まつまをさかりとぞはななく世こそ哀なりけれ

(歌注省略)

世皆不 固如水沫泡焰

むすぶかどみればきえゆく水のあわのしばしたまるるよとはしらずや

(歌注省略)

如露又如電応作如是観

いなづまの光の程か秋の田のなびくほす糸の露の命は

野いのちといふ事は、おくれさきだつためにいひおけれど、あしたの露はひかげをすぎず、人のいのちはももとせにおよ

ぶもあれば、さすがにかはるやうにうちおほゆるを、よくおもひとけばすこしもたがはずあるなり、

三 あしたのどこを おくるより まくらさだむる ゆふべまで

八万四千のおもひ ありとかや それみなみつの こうぞかし

・『法門百首』秋・二八

故仏説為生死長夜

秋の夜のおくるまつだにあるものをいかにすぎにし夢の中までも

(前略) あくるよりいとなみ暮るるまで、思ふ心はみな三途の業なり、(後略)

・『法門百首』無常・八八(『千載和歌集』卷十九・一二五)

不滅不久燃

煙だにしばしたなびけとりべ山立ちわかれにし形みともみむ

(前略) やうやうそでのなみだもかわき、まくらさだむるよひもあるかとおもふほどに、月日はかなくすぎて、ありしわかれのほどにもなりぬれば、(以下略)

四 寂然の歌から『唯心房集』II所収今様への可能性

以上、『唯心房集』IIの今様と寂然の歌とで、表現や雰囲気の一致が見られるものを挙げた。このような一致は寂然作以外のほかの歌にも若干存しているが、それらと右の用例とを比べてみると、寂然の歌との一致がそれらよりも著しい。また、それらは寂然の歌の

ように一人の歌に集中的に見えるものではないのである。本節では、掲げた用例の中で、特徴的なものを中心に見ていく。したがって、これからの説明は、前の用例と比べながら見ていただきたい。用例の中で大半を占める寂然の歌集は、『唯心房集』Ⅰと『法門百首』である。特に『法門百首』には釈教歌とその歌注がついているので、歌意を知るのに役立つ。この注は寂然の自注と言われていて、寂然自身の考え方を知らうえて価値があり、また、平安時代の仏教信仰のあり方を探る上からも注目される歌集と言える。

考察は、用例の説明をするに際して、三つのグループに分けて行う。第一に、寂然の歌から『唯心房集』Ⅱの成立が考えられるもの、第二に、寂然の歌や歌注から『唯心房集』Ⅱの成立が考えられるもの、第三に、もとの典拠を用いて、寂然の歌と『唯心房集』Ⅱがそれぞれ成立したが考えられるものである。まず、寂然の歌から『唯心房集』Ⅱの成立が考えられるものを見てみよう。

『唯心房集』Ⅱの四九番(以下は番号だけを掲げる)の今様と同じく「あたらの月とゆきとを」のフレーズを持つているのは『唯心房集』Ⅰの寂然の歌のみである。『唯心房集』Ⅱの「月とゆきとを」という表現は「あたらの月とゆきとを」という表現を前提にしなければ成り立たない表現であろう。その「月とゆきとを」という表現が『唯心房集』Ⅰに存する。この寂然の歌は、『後撰和歌集』の源信明の歌を本歌にして作られた歌であろう。新古今時代には本歌取りが歌の技法として流行していたが、寂然も本歌取りを好んでいたよ

うである。その実態は寂然の多くの歌から確認することができる。

本歌の信明の歌は、『源氏物語』の引歌や、後の歌集に採られるなど、大いに人口に膾炙していた歌である。寂然もこの有名な信明の歌を『唯心房集』Ⅰの歌に取り入れ、また、それを四九番の今様に取り入れたのではないだろうか。四一番の今様は、「あきののいな」の色を「むなしき色」と表現しているが、この「むなしき色」という表現を歌語として初めて用いているのは、『千載和歌集』所収の寂然の歌である。この歌は『統詞花和歌集』や『月詣和歌集』『定家八代抄』などに採られるなど、歌界での評価が高かったようである。四五番今様の「よもにこのははちりまがひ」の表現は、『唯心房集』Ⅰのほかにその姿を確認することができない。『唯心房集』Ⅰは寂然と知人との贈答歌であるが、両歌は「よものこのは」をキーワードにして交わされている。

以上見てきた用例はまさに寂然の歌が『唯心房集』Ⅱに影響していることを物語っているのではなからうか。

次は、寂然の歌や歌注から『唯心房集』Ⅱの成立が考えられるものを見る。四七番の今様の典拠を、『和漢朗詠集』の白居易の詩に求めることができる。しかし、この今様、或いは『和漢朗詠集』に近い表現が、寂然の『法門百首』の歌注にも見える。寂然は『和漢朗詠集』の表現を好んで和歌や彼の文学に取り入れている。挙げた三つの用例を比べてみると、四七番の今様は、『和漢朗詠集』の表現より『法門百首』の表現に近いことが分かる。これは『和漢朗

詠集』を『法門百首』が取り入れ、またそれを四七番の今様が取り入れたと考えられるのである。次の五二番の今様の歌詞には『唯心房集』Ⅰの二首の歌を凝縮した趣がある。また、そのことは寂然の『法門百首』の歌注にも表れている。『法門百首』の歌注には『伊勢物語』の東下りを連想する雰囲気がある。これを念頭に入れて五二番の今様を見ると、五二番の今様は『伊勢物語』の東下りを下敷きにし、『唯心房集』の歌を取り入れた今様であることが考えられるのである。次に七〇番の今様を見てみよう。詞書や歌注の「雪山の鳥」は、雪山(シマラヤ)に住むと言われる伝説上の鳥で、文学作品の中には『平家物語』に「寒苦鳥」という表現として、また、『撰集抄』には「雪山の鳥の心ちして」という表現として出てくる、仏教的な表現である。これらはいずれも『法門百首』よりも後に成立したと考えられるので、「雪山の鳥」を文学に取り入れたのは、管見に入ったものの中では寂然が最初ではないかと考えられる。その表現が七〇番の今様に見えるのは、七〇番の今様が寂然自作のものである可能性の一つの証左と言えるのではなからうか。

次は、もとの典拠を用いて寂然の歌と『唯心房集』Ⅱがそれぞれ成立したと考えられるものを見る。三二番の今様の、「たちうきはな」の形で見られる初見は、寂然よりやや遅い藤原定家の歌である。しかし、違った形のものとしては、『源氏物語』若紫の尼君の歌に、「まことにや花のあたりは立ちうきとがすむる空のけしきをも見む」とあって、「たちうきはな」の発想をうかがうことができる。三二番

の今様や『新古今和歌集』の歌は、『和漢朗詠集』の漢詩を基にして成立されたと考えられる。しかし、三二番の今様は、『和漢朗詠集』をそのまま利用した形を取り、『新古今和歌集』の歌は、『和漢朗詠集』の詩句をうまい具合に取り入れて、和歌独自のものに仕上げている。次に四四番の今様であるが、『唯心房集』Ⅰの三首は、『古今和歌集』の御春有助の歌を本歌にして作った連作の和歌と考えられる。歌の雰囲気や使われた表現などが同一ニュアンスを持っていることから考えられるのである。しかし、四四番の今様では有助の歌をそのままの形で撰取して、今様として成立させている。これは三二番の今様の『和漢朗詠集』取りと同一パターンと言えるのではなからうか。次に四六番の今様であるが、これは明らかに『拾遺和歌集』の曾禰好忠の歌を典拠にして作られた今様と言える。稿者は『唯心房集』Ⅰの五八番歌を次のように解釈してみる。「荻の葉がそよいでも今は(あの人)が来てくれたのではないかと(何)も驚かない。あの人(草)を分けて私の所を訪れる習いなどがなかったのだから」。しかし、この『唯心房集』Ⅰの歌には、恋人の訪れを待っている私があり、また、なかなか訪れてくれない人に対して半ばあきらめの境地に達した私の気分がある。好忠の歌にも、恋する人を待つている私となかなか訪れてくれない人に対する恨みがあり、その恨みはいつも期待外れにしてしまう風へと移ってゆく詠み手の気分が表れているのである。四六番の今様では、好忠の歌の表現を借りているが、「秋風」を『唯心房集』Ⅰの「荻の葉風」として取り入れ、

恋の気持ちのある今様としたのである。これらの用例は、同じ典拠を用いて成立された寂然の歌と今様であるが、今まで見てきたグルーブのように、これらの用例にも寂然の歌→『唯心房集』Ⅱの図式が成り立つと考えられる。しかし今様には、原拠を撰取するにあたって、寂然の歌を介在して、寂然の歌に近い表現の今様にしたり、寂然の歌とは違う表現の今様にしたりするなど、原拠撰取にバリエーションを与えておもしろい趣向の今様に仕上げていることは注目すべきであろう。

おわりに

『唯心房集』Ⅱについて、当初は寂然自作のものであるという説が主流であった。が、後に段々寂然自作の可能性が薄れて、寂然自作の今様や愛唱歌ではないかという論に展開し、最近では、寂然の愛唱歌を集めた集であろうとする流れが主流になりつつある。しかし稿者は、この流れのままではよいのだろうか、という疑問を感じる。『唯心房集』Ⅱに収められている釈教歌が『新古今和歌集』の入集歌選定の時点ですでに成立しており、選歌の資料とされていたこと、また『唯心房集』Ⅱには、『唯心房集』Ⅰと非常に近い趣向の表現、ないし近い雰囲気のもの、今まで見てきた通り多く存していることなどから、そのように考えざるを得ない。体裁面からも、『唯心房集』Ⅰ・Ⅱは、ともに部立を設けず、四季・恋・別・無常・釈教、といった体裁を取っているのである。この集の名称が『唯心房集』

であることも、これらのことに起因しているのではなからうか。このような性格を持つ『唯心房集』Ⅱが寂然自作のものであることを否定しうるのであろうか。本稿は『唯心房集』Ⅱについて、寂然自作の可能性が薄れてきている現状を見直したい、という気持ちから進めてきたわけである。

今回取り上げた用例やその考察は、寂然の歌のみに深いかわりを持つものもあれば、寂然の歌のみと限定しがたいものも存在しているの、すべて寂然のものから、ということはい言い難いかも知れない。しかし、言えることは、『唯心房集』Ⅱ所収今様の詞章の表現や雰囲気に近い和歌を検出して見ると、ほかの歌人の歌よりも、寂然の歌に近いものが数も多く、表現や雰囲気的一致も著しいことである。このことは、『唯心房集』Ⅱが寂然自作のものである可能性を示唆してくれるのではなからうか。最初に挙げた諸論で、『唯心房集』Ⅱが寂然自作のものではないと考えられる要因として挙げている、『梁塵秘抄』所収の今様と重複するものは、一首に過ぎない¹²。『唯心房集』Ⅱの五〇首のうち、一首が重複するからと言って寂然自作の可能性を完全に否定することができるであらうか。かえって、その一首の作者として寂然の可能性も浮上してくるのではなからうか。¹³

『唯心房集』Ⅱには、寂然の歌と表現が酷似しているものがあり、『法門百首』の歌や歌注に酷似しているものも多く存している。この他に、寂然以外の歌を典拠にしているものも存するが、それらの

典拠を、寂然も歌の中で用いており、その用い方は『唯心房集』Ⅱに酷似しているのである。これらの根拠のすべてが『唯心房集』Ⅱの作者として寂然を比定する決定的な証拠となるとは言い難いかも知れないが、もう一度考え直す余地がある問題として取り上げられるべきではなからうか。

〔注〕

(1) 『唯心房集』Ⅰ・Ⅱの名称に関しては、『私家集大成』の解題に拠った。『私家集大成』には、関戸本を祖本とする、岡山大学本・高松宮本・彰考館本を「唯心房集Ⅰ」とし、穂久迹文庫本に代表される抄出本、『異本寂然法師集』を「唯心房集Ⅲ」としている。

(2) 玉井幸助氏「大原の三寂と三人の姉妹」『學苑』文学と家政、昭33・8)。

(3) 森本元子氏『私家集と新古今集』(昭49・1 明治書院)。

(4) 武田容子氏「常磐三寂についての一考察——寂然を中心として——」(『立正大学日本文学』二十三号、昭45・3)。

(5) 川上新一郎氏「『法門百首』の考察」『王朝の歌と物語(国文学論叢 新集)』一(慶應義塾大学国文学研究会編 昭55・4 桜楓社)。そのほかに、三角洋一氏の「『法門百首』の法文題をめぐって——天台浄土教思想の輪郭——」(『東京大学教養学部 人文科学科人文科学科紀要』第91輯、平2・3)などを

参照。

(6) 『和歌大辞典』「寂然」の項参照。

(7) 『梁塵秘抄』以外の今様集の本文は、『続日本歌謡集成』巻一 中古編(新聞進一編 東京堂出版)を参照。

(8) 『唯心房集』Ⅱ本文、『法門百首』の歌及び歌注の本文や和歌の引用は、『新編国歌大観』に依った。『和漢朗詠集』の本文の引用は『日本古典文学大系』本に依った。以下同じ。

(9) 注5参照。

(10) 『平家物語』巻第九「生ズキノ沙汰」に、「たゞ平家の人々は、いつも水にとちこめられたる心ちして、寒苦鳥にことならず」とある。

(11) 『撰集抄』第九・江口遊女歌事。

(12) 『梁塵秘抄』と重複している一首は、三六番である。

池の涼しき汀には、夏の影こそ無かりけれ、木高き松を吹く風の声も秋とぞ聞こえぬる、(『梁塵秘抄』四三四)

(13) 『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』「新日本古典文学大系」では、この歌の作者として寂然の可能性を提示している。

——ク・ヘギョン、広島大学大学院博士課程後期在学——